

- * 「思い違いをしてはいけません。神は侮られるような方ではありません。人は種を蒔けば、その刈り取りもすることになります。自分の肉のために蒔く者は、肉から滅びを刈り取り、御霊のために蒔く者は、御霊から永遠のいのちを刈り取るのです。」（ガラテヤ6：7～8）「人は種を蒔けばその刈り取りもする」というのは、良い行いには良い報いが、悪い行いには悪い報いが必ずあるという神の約束である。神は少々悪いことは見逃してくれるだろうとか、どんなに神や人に仕えても祝福をくださらないのではないか、と考えることは間違っている。神は必ず「種まき」と「刈り取り」についてはっきりした基準を設けておられる。それは、19節からの「肉の行い」と「御霊の実」である。「肉のために蒔く者」の行く先は「滅び」だという。「滅び」は「魂の滅び」であって、神から全く離れてしまうことであり、人間にとって全く悲惨な状態になるということである。逆に、「御霊によって生きる者」は「永遠のいのち」を結果として与えられる。「永遠のいのち」は「滅び」と正反対で、神と共に永遠に生きるということであり、人間にとって最高の喜びである。
- * また、自分が蒔いた種は自分が刈り取ることが聖書の大原則である。自分がしたことについては自分がその責任を負う。私たちの日常生活においても、良いものにせよ悪いものにせよ、誰か他の人がその報酬を肩代わりし続けることは良くない。人間関係の破綻はこの原則を守らないことから来ることが多い。
- * 「互いの重荷を負い合い、そのようにしてキリストの律法を全うしなさい。」（ガラテヤ6：2）御霊の実を得て「永遠のいのち」を刈り取るためにはどうすればよいか。それは「キリストの律法」を全うすることである。その根幹は主イエスご自身の次のことばにある。「あなたがたに新しい戒めを与えましょう。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」（ヨハネ13：34）「愛」と「交わり」が、2つのキーワードである。キリストの律法は愛の律法であり、その愛は私たちを無条件で愛してくださっている愛、十字架の愛である。そして、「互いの重荷を負い合い」と言われるように、私たちは主にある交わりの中で初めてお互いによく知り、隣人を愛し合うことができるようになるのである。「キリストの律法」は義務ではなく一方的に与えられた恵みである。イエス・キリストに仕え、御霊によって歩み続けたい。